

世界代表司教会議 第 16 回通常総会 準備文書

ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教

2021 年 9 月 7 日

目次

I. とともに旅をするための呼びかけ

II. 制度的にシノドス的な教会

III. 聖書に耳を傾ける

イエス、群衆、使徒たち

回心の二重のダイナミクス：ペトロとコルネリウス（使徒言行録 10 章）

IV. シノダリティの実践：神の民に意見を求めるための道筋

基本的な質問

シノダリティのさまざまな表現

探究すべき 10 のテーマ別要点

1. 旅の同伴者
2. 聴くこと
3. 声に出すこと
4. 祝うこと
5. 宣教における共同責任
6. 教会と社会における対話
7. 他のキリスト教諸派とともに
8. 権威と参加
9. 識別することと決断すること
10. シノダリティの中で自己形成すること

意見聴取に貢献するために

1. 神の教会は世界代表司教会議（シノドス）へと招集されます。「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」と題された道が、2021年10月9日～10日にローマで荘厳に開始され¹、続く10月17日に各部分教会で開始されます。基本的な一つのフェーズは、2023年10月に開催される世界代表司教会議第16回通常総会の開催です。その前、各部分教会が再び参加する実施フェーズがあります（使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』19～21参照）。教皇フランシスコは、今回の呼びかけによって、教会の生活と宣教にとって決定的なテーマについて考えるよう、全教会を招いています。「まさに『シノドス性』の歩みとは、神が第三千年期の教会に期待しておられる歩みなのです」²。第二バチカン公会議で提唱された教会の「刷新」を受けて行われるこの旅は、たまものでもあり、務めでもあります。それはつまり、ともに旅をし、これまでの旅とともに振り返ることで、教会はその経験を通して、どのようなプロセスが、交わりを生き、参加を実現し、宣教に自らを開くのに役立つかを学ぶことができるのです。わたしたちが「ともに旅をする」ということは、実際、巡礼し、宣教する神の民としての教会の性質を、もっとも効果的に実現し、明示するものとなるのです。

2. 次の基本となる質問がわたしたちを促し、導いてくれます。今日、さまざまなレベル（地方レベルから全世界レベルまで）で行われているこの「ともに旅をする」ことは、教会がゆだねられた使命に従って福音を宣べ伝えることを可能にするでしょうか。また、シノドス的な教会として成長するために、聖霊はどのような段階を踏むようにわたしたちを招いているでしょうか。

この問題にとともに取り組むためには、聖霊に耳を傾けることが必要であり、その聖霊は、風のように「思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない」（ヨハネ3・8）のです。聖霊が途上で必ず用意してくださる驚きに心を開いていなければなりません。このようにして、ダイナミズムが活性化され、シノドスによる回心の実りの一部を収穫し始めることができ、それが徐々に成熟していくのです。これらは、教会生活の質にとって、また、わたしたち全員が洗礼と堅信の恵みによって参加している福音化の使命を達成するために、非常に重要な目標です。ここで、教会の形態、様式、構造としてのシノダリティを表現する主な原則を示します。

- ・ 霊が、歴史の中で教会の旅をどのように導き、今日、わたしたちがともに神の愛のあかし人となるよう呼びかけているか、思い起こすこと。
- ・ すべての人、とくにさまざまな理由で周縁部に追いやられた人に、神の民を教え導き貢献するために自分を表現し、聞いてもらう機会を提供する、参加型で包摂的な教会のプロセスを生きること。
- ・ 共同体の善と全人類の利益のため、霊が惜しみなく与えるたまものとカリスマの豊かさと多様性を認識し、評価すること。
- ・ 福音をのべ伝え、より素晴らしく住みやすい世界を築くために責任を果たす、参加型の方法を探求すること。
- ・ 福音に根ざしていない偏見や歪んだ慣習を明らかにし、それを変えようと努めつつ、教会や、それが運営する組織の中で、責任と権力がどのように生きられているかを精査すること。
- ・ 社会的対話、癒し、和解、包摂と参加、民主主義の再構築、友愛の促進の道において、信用のおける主体、信頼できるパートナーとして、キリスト教共同体を維持すること。

¹ 本シノドスの旅のフェーズについては、最終ページ参照。

² 教皇フランシスコ「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説（2015年10月17日）」。

- ・キリスト教共同体のメンバー間、および他のキリスト教諸派や諸宗教の信者共同体、市民グループ、民衆運動といった共同体や他の社会におけるグループとの関係を再生すること。
- ・全世界、地域、国、地方レベルにおける、最近のシノドス的な経験の成果を評価し、活用するよう促進すること。

3. この「準備文書」は、とくに各部分教会において神の民に耳を傾け、意見聴取する最初のフェーズ（2021年10月～2022年4月）を促進するためのツールとして、シノドスの旅に役立つためのものであり、旅に参加するすべての人々のアイデア、エネルギー、創造性が動き始め、そうした努力の成果を共有する助けとなるよう希望しています。この目的をもって「準備文書」は、1) 現代の文脈のいくつかの顕著な特徴を概説することから始め、2) シノダリティの正しい理解と実践のための基本的な神学の参照文献を総合的に示し、3) 旅の途中、瞑想と祈りの省察を養うことができるいくつかの聖書的思想を提供し、4) 生きられたシノダリティの経験を読み直すためのいくつかの視点を示し、5) 祈りと分かち合いの中でこの読み直しの作業を明確にするいくつかの方法を示します。この作業の構成に、具体的な形で付随するために、この「準備文書」に付属して、専用のウェブサイトを利用可能な、方法を示す「手引書」が提示されています³。このサイトでは、本「準備文書」のサポートとして、シノダリティのテーマを深めるためのいくつかの資料が提供されています。その中で、何度か言及されている二つのものを強調したいと思います。教皇フランシスコが2015年10月17日に行った「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説」と、国際神学委員会が作成し、2018年に出版された『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』という文書です。

1. とともに旅をするための呼びかけ

4. シノドスの旅は、社会の新時代的な変化や教会生活の重要な移行を特徴とする歴史的な文脈の中で展開されますが、そうしたことは無視できません。この文脈の複雑さ、その緊張と矛盾の中で、わたしたちは「時のしるしについて吟味し、福音の光のもとにそれを解釈する」（第二バチカン公会議『現代世界憲章』4）ように求められています。ここでは、シノドスのテーマに最も関連性のある世界全体の計画の要素をいくつか紹介しますが、その実像を地域レベルでさらに充実させ、完成させる必要があります。

5. 新型コロナウイルス感染症のパンデミックのような世界的な悲劇は、「同じ船で航海する世界共同体としての意識を一時的に目覚めさせてくれ……そこでは、一人の悪がすべての人を傷つけるのです。一人で救われるのではなく、ともに救われる道しかないことをわたしたちは思い出しました」（教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』32）。同時に、パンデミックは、すでに存在していた不平等や不公平を爆発的に拡大させました。人類は、大衆化と分断のプロセスにますます揺さぶられているようです。世界のあらゆる地域で移民が直面している悲劇的な状況は、一つである人類家族を分断する障壁がいまだにいかに高く、強力であるかを示しています。回勅『ラウダート・シ』と『兄弟の皆さん』は、人類を貫く「断層線」の深さを記録しています。わたしたちはこれらの分析を参考にして、貧しい人々と地球の叫びに耳を傾け、現代においても霊がまき続けている希望と未来のための種を認識するのです。「創造主は決してわたしたちをお見捨てになりません。神は決して御自身の愛する計画

³ www.synod.va 参照。

を放棄したり、わたしたちをお造りになったことを後悔したりなさいません。人類はまだ、皆がともに暮らす家を建設するために一緒に働く能力をもっています」(『ラウダート・シ』13)。

6. 大きな違いがあるにもかかわらず、人類家族を結びつけているこうした状況は、多くの誤った確信の正体を暴いてきた嘆きと苦しみの経験を読み直し、創造主とその被造物の善に対する希望と信仰を育むために、個人と共同体に寄り添う教会の能力を問うています。しかし、わたしたちは、教会自身、自らの中にさえ存在する信仰の欠如や腐敗に直面しなければならないという事実から逃げることはできません。とくに、「あまりに多くの聖職者と奉献生活者による性的虐待、パワーハラスメント、モラルハラスメントのために」⁴、未成年者や弱い立場の人々が経験した苦しみを忘れることはできません。わたしたちは、「神の民であるわたしたちは、身体と心とに傷を負わされた兄弟姉妹の痛みを身に受ける」⁵ことを絶えず求められています。被害者たちの叫びは、あまりにも長く、教会から十分に聞き入れられることのないものでした。癒すのが難しい深い傷であり、そのためのゆるしを十分に求めることは決してできず、「ともに旅する」方向に進んでいくための障害、時には強大な障害となっています。教会全体は、その歴史から受け継いだ聖職者主義に染まった文化の重みと、さまざまな種類の虐待(権力、経済、良心、性的)が接ぎ木された権威の行使の仕方に対処するよう求められています。「どんな活動をして、教会の全成員が能動的にかかわらないかぎり、健全で効果的な変革に必要な動きを起こすことは」⁶は考えられません。「虐待というこうした犯罪を前に、悔い改めの念と、勇気をもってそれと戦う決意とを表すための、回心と、内的な塗油の恵み」⁷を、ともに主に求めようではありませんか。

7. わたしたちの不信仰にもかかわらず、霊は歴史の中に働き、いのちを与える力を示し続けています。新しい信仰のことばと新しい道が開いているのはまさに、人類家族と神の民が耐え忍んだあらゆる種類の苦しみによって掘られたわだちの中なのです。それにより、出来事を神学的な観点から解釈できるだけでなく、試練の中で、キリスト教と教会の生活の道を再構築する根拠を見つけることができるものです。少なからぬ教会が、程度の差こそあれ、計画立てられた神の民との会合や協議のプロセスをすでに始めていることは、大きな希望の理由となっています。それらがシノドス的なスタイルで行われている場合、教会の意識が高まり、全員参加が教会生活に新たな推進力を与えています。また、2018年と2019年のシノドス総会においてすでに示されたことですが、教会内で主人公になりたいという若者の願いや、教会の宣教に参加するための女性と空間をより高く評価してほしいという要望も確認されています。最近の、カテキスタになるよう信徒奉仕職を制度化したことや、女性が朗読奉仕者と祭壇奉仕者になる道を開いたことも、この方向性に沿ったものです。

8. わたしたちは、世界のさまざまな地域でキリスト教共同体が置かれている状況の多様性を無視することはできません。教会が人口の大部分を受け入れ、社会全体の文化的基準となっている国と並んで、カトリック信者が少数派である国もあります。これらの中には、カトリック信者が他のキリスト者とともに、非常に暴力的なものを含む迫害を受ける国もあり、殉教も少なくありません。もし一方

⁴ 教皇フランシスコ「教皇から神の民にあてた手紙(2018年8月20日)」導入。

⁵ 同、2。

⁶ 同。

⁷ 同。

で、世俗化した考え方が宗教を公共空間から排除する傾向があるとすれば、他方では、宗教原理主義が他者の自由を尊重することなく、不寛容と暴力の形態を生み出し、それはまたキリスト教共同体や、それと社会との関係にも影響を及ぼしています。キリスト者は、教会内も含めて、同じような態度をとったり、分裂や対立を煽ったりすることさえ少なくありません。同様に、教会内やその社会との関係性において、民族、人種、カーストや他の社会階層、また宗教原理主義による文化的・構造的暴力を理由とした分裂が反響していることも考慮する必要があります。このような状況は、「ともに旅をする」という表現の意味や、それを実行に移す具体的可能性に深い影響を与えます。

9. このような状況の中で、シノダリティは教会の王道を示しており、霊の働きのもと、みことばに耳を傾けることによって、自らを刷新するよう求められています。受け取った使命を携えながら、教会とその諸組織の違った未来を想像できるかどうかは、一人ひとりがそこに参加し貢献できる、傾聴、対話、共同識別のプロセスを開始する決定に、大きく依存しています。同時に、「ともに旅をする」決断は人類家族にとって預言的しるしであり、そのために、すべての人のための善を追求することができる共有されたプロジェクトが必要です。交わりと兄弟愛、参加と補完性が可能である教会は、自らがのべ伝えることに忠実であり、貧しい人、小さくされた人の側に立ち、彼らの声となることができるでしょう。「ともに旅をする」ためには、わたしたち自身が真にシノドス的なメンタリティをもてるように霊によって学び、勇気と心の自由さをもって、「人間的な制度がつねに必要としている改革をたえず行う」（第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』6。教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』26 参照）ために不可欠な、回心のプロセスに入る必要があります。

II. 制度的にシノドス的な教会

10. 「まさにシノダリティの歩みとは、神が第三千年期の教会に期待しておられる歩みなのです。ある意味、主がわたしたちに求めておられることは、すべて『シノドス』ということばの中にすでに含まれています」⁸。つまりシノドスとは、「教会の聖伝の中で古くから使われている由緒あることばであり、その意味は黙示録のもっとも深い主題に基づいています」⁹。それは「『道であり、真理であり、いのちである』（ヨハネ 14・6）とご自身を示された主イエス」であり、「主イエスに従う人々、キリスト者は元来、『道に従う者』（使徒言行録 9・2、19・9, 23、22・4、24・14, 22 参照）と呼ばれていました」¹⁰。このような観点から見ると、シノダリティは、教会会議や司教総会を開催することや、教会内部の単純な運営問題以上のものであり、それは「神の民である教会の特定の生き方と活動様式（*modus vivendi et operandi*）であり、教会のメンバーが皆ともに旅をし、集いに集まり、教会の福音化の使命に能動的に参加するとき、交わりとしての教会の存在を明らかにし、実体を与えます」¹¹。このように、今回のシノドスのテーマが提案するシノドス的な教会の主軸、つまり交わり、参加、宣教が結び付くのです。本章では、この視点が基づいているいくつかの基礎的な神学文献を簡単に説明します。

⁸ 「50周年記念式典演説」。

⁹ 国際神学委員会『教会の生活と宣教におけるシノダリティ（2018年3月2日）』3。

¹⁰ 同。

¹¹ 同、6。

11. 第1の千年期には、「ともに旅をすること」、つまりシノダリティを実践することが、「父と子と聖霊の一致のうちに結ばれた人々」¹²と理解される教会の、通常の行動様式でした。教会教父たちは、教会組織に分裂を生じさせていた人々に対し、聖アウグスティヌスが「もっとも調和のとれた信仰による陰謀」¹³と表現した、つまりすべての洗礼を受けた人たちの信仰の一致という、世界中に散らばる諸教会との交わりを拒否しました。ここに、教会の生活のすべてのレベル（地方、管区、普遍）におけるシノドス的实践の広範な発展の根源があり、それは公会議において最高の形で表現されました。こうした教会的地平の中で、教会生活への全員参加という原則に触発されて、聖ヨハネ・クリゾストモは「教会とシノドスとは同義語である」¹⁴と明言することができました。教会が位階的な機能をより強く強調するようになった第2の千年期においても、こうしたやり方はその後も続きました。教区や州のシノドスが、公会議と並んで開催されたことはよく知られていますが、教義上の真理を定義する際には、教皇たちは、『信仰において (*in credendo*)』誤ることのない』（『福音の喜び』119）、神の民全体の「信仰の感覚 (*sensus fidei*)」の権威に訴えることによって、教会全体の信仰を知るために司教たちに相談したいと考えました。

12. 第二バチカン公会議は、この聖伝のダイナミズムに支えられています。「しかし神は、人々を個別的に、まったく相互の関わりなしに聖化し救うのではなく、彼らを、真理に基づいて神を認め忠実に神に仕える一つの民として確立することを望んだ」（『教会憲章』9）と、公会議は強調します。神の民のメンバーは洗礼によって結ばれており、「ある人々はキリストのみ心によって他の人々のための教師、神秘の分配者、牧者として立てられているが、キリストのからだの建設に関する、すべての信者に共通の尊厳と働きについては、真実に平等」（同、32）なのです。したがって、洗礼を受けたすべての人は、「多様で、秩序づけられた豊かさをもつ、それぞれのカリスマ、召命、奉仕職を実行する」¹⁵ことによって、キリストの祭司職、預言職、王職に参加し、個人としても神の民全体としても、福音化の能動的な主体となるのです。

13. 公会議は、洗礼で受けた聖霊による塗油によって、いかに信者の総体が「信仰において誤ることができない」かを強調しました。「この特性は、『司教をはじめとしてすべての信徒を含む』信者の総体が信仰と道徳のことがらについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通して現れる」（『教会憲章』12）のです。忠実な人を「すべての真理に」（ヨハネ16・13）導くのは霊です。霊の働きを通して、「使徒たちに由来するこの聖伝は、……教会の中で進展」し、それによって神の民は「伝えられた事物やことばの理解」の中で成長できるのです。この理解が「深まるのは、信者たちが観想と研究によってそれらを心のうちで思いめぐらし（ルカ2・19、51参照）、また体験された霊的なことがらを深く理解し、あるいは司教職の継承とともに真理の確かなたまものを受けた人たちが告げ知らせるから」（第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』8）です。実際、司牧者たちによって集められたこの民は、教会にゆだねられた神のみことばという聖なる遺産を守り、粘り強く、使徒たちの教え、兄弟愛の交わり、パンを裂くこと、祈りをたえず保つのです。「したがって、伝

¹² キプリアヌス『主の祈り』23。

¹³ アウグスティヌス『書簡』194、31。

¹⁴ 『詩編注解』149。

¹⁵ 『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』6。

えられてきた信仰を保ち実行し宣言するとき、司教たちと信者たちが見事に心を一つにする」(同、10) のです。

14. 司牧者たちは、神によって「全教会の信仰の正統な保護者、解釈者、証人」¹⁶として任命されたのですから、自分にゆだねられた群れに耳を傾けることを恐れてはなりません。神の民からの意見聴取は、教会内で多数決原理に基づく民主主義の力学を前提とすることを意味するものではありません。なぜなら、すべてのシノドス的なプロセスへの参加の基礎にあるのは、福音化という共通の使命に対する共有された情熱であり、相反する利益を代表することではないからです。言い換えれば、これは「位階的に構造化された共同体の中心で」¹⁷しか起こりえない、教会のプロセスなのです。同じ信仰をもつ全教会の全員一致したコンセンサスが実現されるのは、神の民の「信仰の感覚」と司牧者の教導職との間の実りある結びつきにおいてなのです。すべてのシノドス的なプロセスにおいて、司教たちは、霊が教会に何を語っているかを自分自身からではなく、「キリストが果たした預言職にも参加する」(『教会憲章』12) 神の民に耳を傾けることによって識別するよう求められています。そうすることが、教会を成長させる「ともに旅をする」ことの明白な形となるです。聖ベネディクトは、共同体の中で重要な地位を占めていない人たち(この場合、最も若い人たち)に「主はしばしば……よりよい道を示すことがある」¹⁸と強調しています。したがって、司教たちは、すべての人に手を差し伸べるように注意すべきで、そうすることにより、シノドス的な旅の秩序ある展開の中で、使徒パウロが共同体に勧めることが実現するのです。「“霊”の火を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい」(一テサロニケ5・19-21)。

15. わたしたち全員が招かれている旅の意味は、何よりも、誰もが学ぶべきことをもっているシノドス的な教会の顔かたちを発見することにあります。そこでは、「一人ひとりにとって学ぶことがあります。信徒、司教団、ローマの司教、それぞれがお互いに耳を傾け、また皆が『真理の霊』(ヨハネ14・17)である聖霊に耳を傾けます。それは、聖霊が『諸教会に告げる』(黙示録2・7)ことを認識するためです」¹⁹。ローマの司教は、教会一致の原理と基礎として、唯一単一のカトリック教会が存在する中で(『教会憲章』23参照)、またそこから存在するすべての司教とすべての部分教会に、自信と勇気をもってシノダリティの道に加わるよう求めます。この「ともに旅をする」ことにおいて、多様なまもの、カリスマ、奉仕職を一致させる交わりが、どのようにして宣教のためになるのかを発見する助けを、わたしたちは霊に願い求めます。つまり、シノドス的な教会は「出向いていく」教会であり、「門の開かれた」(『福音の喜び』46)宣教する教会です。これには、わたしたちが一つの洗礼によって結ばれている他の教会やキリスト教共同体との関係を深めるといふ呼びかけが含まれています。「ともに旅をする」という視点はさらに広く、わたしたちが「喜びと希望、苦悩と不安」(第二バチカン公会議『現代世界憲章』1)を共有するすべての人類を対象としています。シノドス的な教会は何よりも、それを通じてすべての人の善を追求する、共有されたプロジェクトを提案することができない国々の共同体にとっての預言者的しるしです。つまり、シノダリティを実践することは、今日、教会にとつ

¹⁶ 「50周年記念式典演説」。

¹⁷ 『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』69。

¹⁸ 『聖ベネディクトの戒律』(古田暁訳)第3章3。

¹⁹ 「50周年記念式典演説」。

て、「救いの普遍的秘跡」（『教会憲章』48）、「神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具」（同、1）となるためのもっとも明白な手段なのです。

III. 聖書に耳を傾ける

16. こうして諸教会が「ともに旅をする」のを照らし、生き生きとさせる神の霊は、神のみことばを聞いて実践する使徒たちや何世代にも渡る弟子たちに約束された、イエスの宣教において働くものと同じ霊です。主の約束によれば、この霊は、イエスの福音の継続性を確証するにとどまらず、つねに新しいイエスの啓示の深みを照らし出し、教会の旅を支えるために必要な決断に息吹を与えます（ヨハネ 14・25-26、15・26-27、16・12-15 参照）。したがって、シノドスの教会を建設するわたしたちの旅が、聖書にある二つの「イメージ」に触発されるのは妥当なことです。一つは、福音化の旅に絶えず伴う「共同体の場面」の表現の中に現れており、もう一つは、ペトロと初代教会の共同体が、信仰の分かち合いに不当な制限を加えることの危険性を認識した霊の体験を指しています。主に従い、霊に従順でありながら、ともに旅をするというシノドス的な経験は、啓示のこれら二つの特徴に関する観想から決定的なひらめきを得ることができるでしょう。

イエス、群衆、使徒たち

17. その基本的な構成において、イエスが神の国の到来を告げる際、福音の中で自らを明らかにしていくという、繰り返されるやり方でもととの場面は現れます。基本的には、3人の登場人物（プラス1人）が関わっています。1人目は当然、絶対的な主人公である「イエス」で、彼は率先して「分け隔てなく」（使徒 10・34 参照）、神の国の到来を示すことばやしるしの種をまきます。さまざまな形でイエスは、神から「離れた」人や、共同体から「見捨てられた」人たち（福音書のことばで言えば、罪びとや貧しい人たち）に特別な注意を向けます。そのことばと行動を通して、父なる神の名と聖霊の力によって、悪からの解放と希望への回心を授けます。主の呼びかけやそれを受け入れる応答がさまざまであったとしても、共通の特徴は、信仰はつねに、人を大切にするものとして現れるということです。すなわち、彼らの願いが聞き届けられ、彼らの困難に救いが与えられ、彼らが人の役に立とうとすることが評価され、彼らの尊厳が神のまなざしによって確認され、共同体によって認識されるに至るのです。

18. 実際、福音化の働きと救いのメッセージは、イエスのように、可能な限り最大に幅広い人々に対しつねに心を開いていなければ理解されるものとはならないでしょう。そうした人々は、福音書では「群衆」と呼ばれていますが、つまりそれは、イエスに続いて道を歩み、時には救いのしるしやことばを期待してイエスを追い回しさえする、すべての人々です。これこそが、啓示の場面における第2の登場人物です。福音をのべ伝えることは、悟りを開いた人や選ばれたわずかな人だけに呼びかけられているわけではありません。イエスが対話する相手は普通の生活を営む「人々」であり、人間の条件を有する「あらゆる人」で、イエスは彼らに神のたまものと救いの招きに直接触れさせます。あかしする人々を驚かせ、時にはスキャンダルとなるようなやり方で、イエスは群衆の中から現れたすべての人々を対話の相手として受け入れます。イエスは、自分がもたらす祝福から除外されることに納得できないカナン人の女性（マタイ 15・21-28 参照）の熱烈な抗議に耳を傾けます。社会的にも宗教

的にも問題のある女性であったにもかかわらず、サマリア人の女性と対話することを受け入れます（ヨハネ 4・1-42 参照）。正式な宗教では恵みの範囲外として退けられていた生まれつきの盲人の男性（ヨハネ 9 章参照）に、自由と感謝に満ちた信仰の行為を求めます。

19. 弟子としての忠実さを経験して、より明確にイエスに従う人もいれば、日常生活に戻るよう促される人もいます。しかし、全員が自らを救った信仰の力をあかします（マタイ 15・28 参照）。イエスに従う人々の中で、群衆がもつべき啓示との関係性、神の国の到来との関係性を、権威をもって仲介する役割を与えられ、イエス自身が最初から招き入れた「使徒たち」の姿は、明らかに際立ってきます。第 3 の登場人物が場面に現れるのは、癒しや回心によるのではなく、イエスの呼びかけに合致したからです。使徒たちの選出は、権力と分離といった排他的地位の特権ではなく、祝福と友情といった包摂的な奉仕職の恵みです。復活した主の霊のたまもののおかげで、彼らはイエスに取って代わるのではなく、イエスの場を守るようになるのです。イエスの現存にフィルターをかけるのではなく、イエスに出会いやすくするのです。

20. イエス、多様な群衆、使徒たち。これは、教会がますます本来の姿になるために、つねに思いめぐらし深く探求しなければならない像であり、神秘です。3 者の登場人物のうち、誰もこの場面から離れることはできません。もし、イエスが不在で、他の誰かがイエスの代わりになれば、教会は、使徒たちと群衆との間の契約となり、彼らの対話は政治的なゲームの筋書きに従うこととなります。イエスによって権能を与えられ、霊によって導かれた使徒たちがいなければ、福音の真理との関係性は崩れ、群衆はイエスを受け入れようが拒否しようが、イエスに関する神話と観念にさらされたままとなります。群衆がいなければ、使徒たちとイエスとの関係性は、セクト的で自己を反映した宗教形態に墮し、神がすべての人に人格的に語りかけ、神の救いを提供するという直接的な自己啓示から生まれる福音化は、その光を失ってしまいます。

21. ここに、他の 3 者がひどく分離する場面をもち込む「追加」の登場人物、敵役がいます。十字架という不安を呼び覚ます光景に直面し、去っていく弟子たちと、気分を変えてしまう群衆がいます。分裂させ、共通の道を妨げようとする狡猾さは、宗教的な厳しさという形、イエスよりも厳しいものと称する律法主義的な命令という形、霊を見分けるよりも効果的だとする世俗的な政治的知恵の誘惑といった形で、淡々と現れてきます。「第 4 の登場人物」の幻惑から逃れるためには、継続的な回心が必要です。この点で象徴的なのが、百人隊長コルネリウスの物語（使徒言行録 10 章参照）で、シノドスの教会にとって重要な基準点となるエルサレム「使徒会議」（同 15 章参照）の先例です。

回心の二重のダイナミクス：ペトロとコルネリウス（使徒言行録 10 章）

22. この物語では、まずコルネリウスの回心が語られ、コルネリウスはある種の告知も受けています。コルネリウスは異教徒で、ローマ人と思われ、占領している軍隊の百人隊長（下級将校）であり、暴力と虐待に基づいた職業を実践しています。しかし、彼は祈りと施しに専心し、つまり神との関係を深め、隣人を大切にしています。驚くべきことに、天使が入ってきて、彼の名前を呼び、彼のしもべをヤッファに派遣—宣教を表す動詞—し、ペトロを招く—召命を表す動詞—ように勧めたのは、まさに彼の家だったのです。物語はその後、ペトロの回心の話となります。その日、彼は幻を見て、その

うちいくつかは汚れていた動物を殺して食べるように命じる声がありました。彼の答えは決然としたものです。「主よ、とんでもないことです」(使徒言行録 10・14)。彼に語りかけているのは主であると認識するものの、彼は断固拒否します。なぜなら、その命令は、彼の宗教的アイデンティティにとって不可分の律法のおきてを破るものだからです。そしてこれは、分離と排除を伴う、他民族との違いとしてその選を理解する姿を表しています。

23. その使徒は深く悩んだまま、起こったことの意味を考えていると、コルネリウスから派遣された人たちが到着し、霊は彼らがコルネリウスの使者であることを伝えます。ペトロは、園でのイエスのことばを思い起こさせることばで、彼らに答えます。「あなたがたが探しているのは、このわたしです」(同 10・21)。これこそが真の正しい回心であり、自分自身の文化的・宗教的範疇から抜け出るという、苦しくも大きな実りのある道なのです。ペトロは、自分がずっと禁じられていると思っていた食べ物を異教徒と一緒に食べることを受け入れ、それがいのちの道具であり、神や他者との交わりの道具であることを認識します。彼が自分の見た幻の意味を悟るのは、人々を歓迎し、彼らとともに旅をし、彼らの家に入るという人々との出会いの中においてなのです。つまり、神の目にふさわしくない人間などなく、選によって生じる違いは、排他的な好みを意味するのではなく、普遍的な広さをもつ奉仕とあかしを意味するのです。

24. コルネリウスもペトロも、自分の回心の旅に他者を巻き込んで、旅の仲間になっています。使徒としての行動は、共同体を生み出し、障壁を壊し、出会いを促進することで、神のみ旨を成就させます。2人の主人公の出会いの中で、ことばが中心的な役割を果たします。コルネリウスはまず自分の体験を分かち合います。ペトロは彼の話聞いたのち話し、自分に起こったことを順に報告し、主との親密さを証明します。主は、人々を悪の虜にし、人間性を失わせるものから解放するために、一人ひとりに個別に会うために出向いていくのです(同 10・38 参照)。こうした対話の仕方は、ペトロがエルサレムで、割礼を受けている信者たちから非難されたときに用いたやり方と似ています。彼らは、ペトロが霊の注ぎを無視して、彼ら全員の関心が集中しているらしい伝統的規範を破ったと批判していました。「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行き、一緒に食事をした」(同 11・3)。そうした葛藤の中で、ペトロは自分の身に起こったことと、戸惑い、理解不能、抵抗といった彼の反応を報告します。まさにこうすることが、最初は攻撃的で抵抗していた相手が、耳を傾け、すでに起こったことを受け入れる助けとなるのです。聖書は、エルサレムの「使徒会議」でもそうであったように、ともに霊に耳を傾けることからなる識別のプロセスの中で、意味を解釈する助けとなります。

IV. シノダリティの実践: 神の民に意見を求めるための道筋

25. みことばに照らされ、聖伝に根ざしたシノドス的な歩みは、神の民の具体的な生活に根ざしています。事実、それは特別な源泉でもある特異性を表しています。つまり、その目的であるシノダリティは、その方法でもあるのです。言い換えればそれは、漸進的なシノドスによる回心がキリスト教共同体にもたらすダイナミズムの成果を即座に収穫し始めることを可能にする、ある種の建設現場か、あるいは試験的体験を構成するものです。他方、シノドス的な歩みは、さまざまなレベル、さまざまな強度で生きられたシノダリティの経験を参照することしかできません。つまり、継続して進むべき方向を識別するための貴重な要素は、そうした経験の強みと成果に基づいて、またその限界と困難さ

に基づいて提供されます。当然ここで、現在のシノドスの旅によって活性化された経験について言及されていますが、シノダリティということばが知られてなく、使われていないとしても、「ともに旅をする」という形が普段の生活の中ですでに行われているすべての経験にも言及されます。

基本的な質問

26. 冒頭で述べたように、神の民からのこの意見聴取を引き出す基本的な質問は、以下の通りです。

シノドスの教会は、福音を告げながら、「ともに旅をする」のです。この「ともに旅をする」ということは、今日、みなさんの部分教会（訳注：＝教区）の中で、どのような形で起こっているでしょうか。わたしたちが「ともに旅をする」中で成長するために、霊は、わたしたちがどのような段階を踏むよう招いているでしょうか。

これに答えるために、以下のことが求められます。

- a) 自分の部分教会で、この基本的な質問がどのような経験を思い起こさせるか、自問すること。
- b) これらの経験をより深く読み直してみる。どのような喜びをもたらしたか。どのような困難や障害に遭遇したか。どのような傷が明るみに出たか。どのような洞察が得られたか。
- c) 分かち合うべき果実を集めること。これらの経験の中で、霊の声はどこで鳴り響いているか。霊はわたしたちに何を求めているか。確認すべき点、変化の可能性、踏むべき段階は何か。どこでコンセンサスを得られるか。わたしたちの部分教会には、どのような道が開かれているか。

シノダリティのさまざまな表現

27. 基本的な質問によって促される祈り、考察、分かち合いの中で、シノダリティが「教会の構成的次元」²⁰として明確に表現されている三つのレベルを心に留めておくとよいでしょう。

- ・ 教会が日常的に生き、働いている生活様式のレベル。これは、ともに旅をし、福音をのべ伝えるために聖霊の力のうちに主イエスによって招かれた神の民としての教会の性質を表しています。この生活様式は、「みことばに耳を傾けエウカリスチアを祝う共同体、交わりの兄弟愛、さらにあらゆるレベルで、さまざまな奉仕職や役割を区別しながらの、生活と宣教における神の民全体の共同責任と参加」²¹を通して実現されています。
- ・ 神学的、教会法的観点からも決定される、教会の構造とプロセスのレベル。その中で、教会のシノドス的な性質は、地方、地域、普遍教会のレベルで組織的な形で表されている。
- ・ 教会の規範によって決定された特定の手続きに従って、権限ある教会権威によってその中で教会が招集される、シノドス的なプロセスとイベントのレベル。

²⁰ 『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』 70。

²¹ 同。

論理的な観点とは異なりますが、これらの三つのレベルは互いに参照し合い、首尾一貫した方法でまとめられなければなりません。そうでなければ、反証が広まり、教会の信頼性が損なわれます。実際、構造やプロセスにおいて具体化されていなければ、シノダリティの生活様式は、意図や熱望のレベルから美辞麗句のレベルへと容易に退化してしまいますし、プロセスやイベントも、それがもし適切な生活様式によって活気づけられなければ、空虚で形式的なものになってしまいます。

28. さらに、体験を読み直す際には、「ともに旅をする」ことが、二つの異なる視点から理解できることを念頭に置く必要がありますが、その二つは相互に強く関連しています。第1の視点は、部分教会内部の生活、つまり、構成する各部分（何よりもまず信者たちとその司牧者たちとの間、また教区シノドスをはじめとする教会法の規定で想定される参加型の諸機関を通して）と分割されている共同体（とりわけ各小教区）との関係性を見るものです。次に、司教たちとローマの司教との関係性、またシノダリティの中間的な機関（国内、国際、大陸レベルの組織も含めた、東方典礼カトリック教会のシノドス [*Synods of Bishops of the Patriarchal and Major Archdiocesan Churches*]、自治権を有する評議会や総会 [*Councils of Hierarchs and Assemblies of Hierarchs of the Churches sui iuris*] と、各国司教協議会）を通じた関係性を考察します。さらに、各部分教会が、さまざまな形態の観想修道者、修道者、奉獻生活者、信徒団体や運動体、多様な種類の教会関連組織（学校、病院、大学、財団、慈善団体、援助団体など）の貢献を、自らのうちに統合する方法にまで及びます。最後に、この視点はまた、同じ洗礼のたまものを共有する他のキリスト教諸派の兄弟姉妹との関係性や共通の取り組みも含んでいます。

29. 第2の視点は、神の民が人類家族全体とどのようにともに旅をするかを考えます。そこで、わたしたちのまなざしは、他の宗教の信者、信仰から離れている人々、また特定の社会環境やグループ、そうした諸団体（政界、文化界、経済界、金融界、労働界、労働組合、企業団体、非政府組織、市民団体、市民運動、種々のマイノリティ・グループ、貧しく排除された人々など）との関係、対話、可能な共通の取り組みの状況について焦点を当てます。

探究すべき10のテーマ別要点

30. 経験を強調し、協議に豊かな形で貢献するために、わたしたちは以下に「生きられたシノダリティ」の諸側面を明確に示す、10のテーマ別要点を示します。それらは、異なった地域の文脈に適応させ、随時、統合、説明、簡略化、深化されるべきもので、参加と応答がより困難な人々にとくに注意を払うこととなります。この「準備文書」に添付されている「手引書」は、さまざまな質問に答えるグループが祈り、養成、考察、交流の時間を具体的に刺激することができるように、ツール、行程表、示唆を提供しています。

1. 旅の同伴者

教会でも社会でも、わたしたちは同じ道を並んで進んでいます。皆さんの地方教会では、「ともに旅をする」のは誰ですか。「わたしたちの教会」というとき、誰がその一部でしょうか。誰がわたしたちとともに旅をするように頼んでいるのでしょうか。教会の枠の外にいる人たちも含めて、道行く友は誰

ですか。明示的に、あるいは事実上、どういう人、グループが周縁部に取り残されているのでしょうか。

2. 聴くこと

聞くことは最初の一步ですが、それには偏見のない、開かれた精神と心が必要です。わたしたちの部分教会は、誰に対し「耳を傾ける必要がある」でしょうか。信徒、とくに若者や女性はどのように耳を傾けてもらっているでしょうか。奉献生活の男女の貢献はどのように統合されているでしょうか。マイノリティの人、見捨てられた人、排除された人の声に耳を傾ける場はありますか。耳を傾けることを妨げている偏見や固定観念を認識していますか。わたしたちが生活している社会的、文化的背景に対しどのように耳を傾けていますか。

3. 声に出すこと

勇気と大胆さ、つまり、自由、真理といつくしみを統合して話すよう、すべての人は招かれています。地域社会やその団体の中で、二枚舌やご都合主義を排した、自由で真正な対話術をどのように促進しますか。さらに、わたしたちが属している社会との関係においてはどうでしょうか。自分にとって大切なことを、いつ、どのようにして伝えるようにしますか。メディア全体（カトリック・メディアだけでなく）との関係はどう機能しているでしょうか。誰がキリスト教共同体を代表して発言しますか、またその人はどのようにして選ばれますか。

4. 祝うこと

「ともに旅をする」のは、共同体でみことばに耳を傾け、エウカリスチアを祝うことに基づいている場合にのみ可能です。祈りと典礼祭儀は、わたしたちが「ともに旅をする」のをどのように奮い立たせ、方向づけているでしょうか。この二つは、もっとも重要な決定にどのように刺激を与えているでしょうか。すべての信徒による典礼への能動的参加と、聖化の働きの実践をどう促進しているでしょうか。朗読奉仕と祭壇奉仕を実施するため、どのような空間が設けられているでしょうか。

5. 宣教における共同責任

シノダリティとは、教会の全メンバーが参加するよう求められている、教会の宣教に奉仕するためです。わたしたちは皆、宣教する弟子であるので、洗礼を受けた一人ひとりはいかにして宣教の主人公として呼ばれるでしょうか。社会での奉仕（社会的・政治的責任、科学研究や教育、社会正義の推進、人権保護、「共通の家」のケアなど）に取り組むメンバーを、共同体はどのように支えているでしょうか。彼らが宣教の論理でこれらの責任を生き抜くのを、皆さんはどのように支援していますか。宣教に関連する選びについての識別はどのようになされていますか、また誰がそれに参加していますか。多くの教会、とくに東方教会の財産を構成するさまざまな伝統は、効果的なキリスト教のあかしという観点から、シノドスの様式を尊重しながら、どのように統合され適用されているでしょうか。さまざまな「自治権を有する (*sui iuris*) 諸教会」が存在する地域では、どのように協力関係が機能しているでしょうか。

6. 教会と社会における対話

対話は、沈黙や苦しみをも含む忍耐の道であるものの、個人や諸民族の経験を集めることができます。わたしたちの部分教会では、どのような場で、どのような形で対話が行われているのでしょうか。ビジョンの相違、対立、困難はどう対処されているのでしょうか。隣接する教区と、地域の修道会と、また修道会の中で、信徒団体や運動体などと、またその中で、どのように協力が促進されているのでしょうか。他宗教の信者や無宗教の人々と、どういった対話や共同責任の経験があるのでしょうか。教会は、他の社会領域、つまり政界、経済界、文化界、市民社会、貧しい人々などとどう対話し、彼らからどのように学んでいますか。

7. 他のキリスト教諸派とともに

一つの洗礼によって結ばれた、異なる信仰告白をもつキリスト者間の対話は、シノドスの旅において特別な位置を占めています。他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らは関心があるのでしょうか。こうして「ともに旅をする」ことからどのような実りを得てきたのでしょうか。何が困難さでしょうか。

8. 権威と参加

シノド斯的教会は、参加型で共同責任を負う教会です。追求すべき目標、それを達成するための方法、そして踏むべき段階をどのように特定するのでしょうか。わたしたちの部分教会の中で、権威はどのように行使されるのでしょうか。チームワークと共同責任の実践とはどういうものなのでしょう。信徒奉仕職と信徒による責任の引き受けはどのように促進されていますか。部分教会レベルでは、シノド斯的機関はどのように機能していますか。それらは実りある経験となっていますか。

9. 識別することと決断すること

シノドス的な生活様式では、霊への共通の従順さから生まれるコンセンサスに基づいて、識別を通して決定がなされます。どのような手順と方法で、わたしたちは共同で識別し、決定を下すのでしょうか。どうすれば、それらは改善できるのでしょうか。位階的に組織された共同体において、意思決定への参加をどう促進できるのでしょうか。協議のフェーズと熟慮するフェーズ、意思決定のプロセスと意思決定の瞬間をどのようにつないでいけるのでしょうか。透明性と説明責任を、どのように、またどういったツールを使って促進できるのでしょうか。

10. シノダリティの中で自己形成すること

「ともに旅をする」という霊性は、人間、キリスト者、家族、そして地域社会の養成のための教育原理となることが求められています。人々、とくにキリスト教共同体の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」ことがさらにできるようになるために、わたしたちはどのような養成ができるのでしょうか。識別と権威行使のため、どのような養成を提供できるのでしょうか。わたしたちが浸されている文化のダイナミズムや、それがわたしたちの教会生活の様式に与える影響を読み取るのに、どういったツールが役立つのでしょうか。

意見聴取に貢献するために

31. シノドス的な旅の第1フェーズの目的は、地域の特定の現実に応じて、もっとも適切な方法で、すべての異なるレベルの部分教会の司牧者と信者とを巻き込んで、さまざまな表現や局面で生きられたシノダリティの経験という宝を集めるために、幅広い意見聴取のプロセスを促進することです。司教によって準備される意見聴取は、「奉献生活者の男女が提供できる貴重な貢献を逃すことなく、個人的にも団体としても、各教会の司祭、助祭、信徒に」（教皇フランシスコ使徒憲章『エписコパーリス・コムニオ』7）向けられています。部分教会の参加諸団体の貢献がとくに求められており、中でも「司祭評議会」と「司牧評議会」の貢献が求められており、これらの評議会から「シノドス的な教会を（真に）形成し始めることができるのです」²²。また、「準備文書」が送付される他の教会組織からの貢献や、自らの貢献を直接送りたいと考える人たちからの貢献も、同様に貴重なものとなるでしょう。最後に、部分教会の中で何らかの役割や責任を担っている人たちの声だけでなく、貧しく排除された人たちの声も、その場を見つけることが基本的に重要になります。

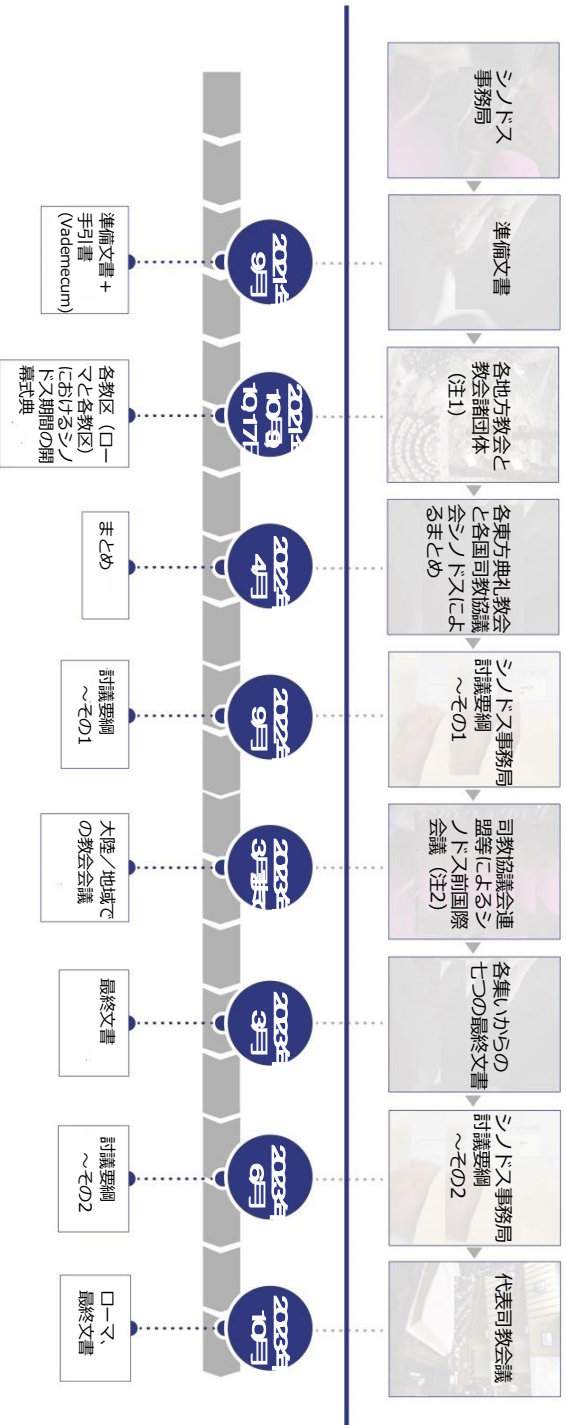
32. 各部分教会が、この傾聴と識別の作業の最後に練り上げるまとめは、普遍教会の旅に対するその貢献となります。この旅の次のフェーズをより簡単に、より持続可能なものにするために、祈りと考察の成果を最大10ページに要約することが重要です。さらに文脈を解説し説明することが必要であれば、他の文書を添付して、それらを支持または統合することができます。シノドスの目的、したがってこの意見聴取の目的は、文書を作成することではなく、「夢を植え付け、預言と幻を描き、希望を花開かせ、信頼を生み、傷をいやし、ともに関係性を編み、希望の夜明けを目覚めさせ、互いに学び合い、頭脳明晰で機知に富むことを作り出すことは、精神を照らし、心を温め、手に力を与え」²³ることだということを、わたしたちは思い起こします。

²² 「50周年記念式典演説」。

²³ 教皇フランシスコ「世界代表司教会議第15回通常総会の開会あいさつ（2018年10月3日）」。

ともしばし教養のため 交り 参りて 聖教

世界代表教養青年回国協議会



(注1) 教皇庁各省庁、奉教生活者 (国際総長連盟と総長連盟ほか、連盟)や協議会)、信者運動体、高等教育機関
 (注2) アフリカ (SECAM)、オセアニア (FBCO)、アジア (FABC)、中東 (CPCO)、欧州 (CEE)、ラテンアメリカ (CELAM)、北米 (USCCB+CCCB)

